『西之表市史』下巻　正誤表

ページ	段・行目	誤	正
目次16	上段28行目	岡本家に伝わる金毘羅宮の信徒壇	岡元家に伝わる金毘羅宮の信徒壇
凡例1	上段5行目	史実の内容は客観的であることに努め、出典・根拠を明らかにした。各編末に参考文献や資料を掲載した。	史実の内容は客観的であることに努め、出典・根拠を明らかにした。各編末に参考文献や資料を掲載した。ただし、第八編校区史については、地域での言い伝えや伝聞が含まれており、出典・根拠が明らかでない場合がある。
42	上段15行目	昭和二十年二月十二～十三日、西之表の西海岸に溺死した兵士が数百体漂着した。	昭和十九年二月十二～十三日、西之表の西海岸に溺死した兵士が数百体漂着した。
42	下段8行目	昭和十九年二月にも、同じように種子島西海岸に、兵士の死体が多数漂着した記録が残されている。	昭和二十年二月にも、同じように種子島西海岸に、兵士の死体が多数漂着した記録が残されている。
49	下段	※別紙1参照	※別紙1参照
68	下段	※別紙2参照	※別紙2参照
80	上段13行目	残っていた人たちを（日本軍は）かき集めたんだという印象であったという（日刊ゲンダイDIGITAL）。	残っていた人たちを（日本軍は）かき集めたんだという印象であったという（日刊ゲンダイDIGITAL）。※参考文献では昭和十九年、二十年にいずれも似たような事件の記載があるが、その事件が二回あったという記載はない。護国神社戦没者資料では、昭和十九年の記録のみ残っている。当時の記録において、伝聞誤りがあったと推察する。
594	下段12行目	現在の中目医院付近は、特に狭い所だった	現在の中目歯科医院付近は、特に狭い所だった
595	下段18行目	墓地公園から桃園へしばらく行くと、三栄石油充填所がある。三〇〇メートルほど道路から右手が「馬飼屋敷」、左手が「馬飼」と呼ばれている	墓地公園から桃園へ三〇〇メートルほどのところの道路から右手が「馬飼屋敷」。左手が「馬飼」と呼ばれている。

『西之表市史』下巻　正誤表

ページ	段・行目	誤	正
634	下段19行目	榕城、住吉、現和の各旧中学校、旧種子島高校、旧種子島実業高校等の校歌を作曲した	榕城、住吉、現和の各旧中学校、旧馬毛島小中学校、旧種子島高校、旧種子島実業高校、旧県立種子島農林学校、旧県立種子島高等女学校の校歌を作曲した。
655	下段2行目	鹿児島地方法務局西之表出張所と改称。熊毛支庁の建て替え工事期間中の仮事務所となる。	鹿児島地方法務局西之表出張所と改称。
655	下段7行目	十月十三日、種子島高等学校北校舎竣工。男女共学となる	十月十三日、種子島高等学校北校舎竣工。
656	下段22行目	十月十四日、県種子島合同庁舎落成 二月二十五日、鹿児島県種子島合同庁舎竣工	二月二十五日、鹿児島県種子島合同庁舎竣工
721	上段13行目	筧良平氏宅の倉庫から背後の山を登る道。覚家の墓～山寺～柳原に行く道。	筧良平氏宅の倉庫から背後の山を登る道。筧家の墓～山寺～柳原に行く道。
721	上段17行目	赤字嵐の長野茂氏の畑は山寺の跡。土器片が出る。	赤木嵐の長野茂氏の畑は山寺の跡。土器片が出る。
721	上段19行目	シイタケ栽培をしていた寛家の辺り。	シイタケ栽培をしていた筧家の辺り。
721	上段21行目	寛家の移住当時住宅のあったところ。	筧家の移住当時住宅のあったところ。
732	上段16行目	それでも、何回か空襲を受け、兵一三人が死亡したと『国上郷土誌』に記されている。	それでも、何回か空襲を受け、兵士三人が死亡したと『国上郷土誌』に記されている。
740	上段8行目	**国上奥集落、岡本家に伝わる金毘羅宮の信徒壇** 国上奥集落の岡本和美氏宅は法華宗の檀家である。法華宗の仏壇の上に、金毘羅様と呼ばれている信徒壇が置かれていて、朝夕お参りされている。金毘羅様は航海の神である。神仏習合で権現宮となり、明治初期の廃仏毀釈で神仏の分離がなされている。なぜ岡本家に安置されているのは不明である。	**国上奥集落、岡元家に伝わる金毘羅宮の信徒壇** 国上奥集落の岡元和美氏宅は法華宗の檀家である。法華宗の仏壇の上に、金毘羅様と呼ばれている信徒壇が置かれていて、朝夕お参りされている。金毘羅様は航海の神である。神仏習合で権現宮となり、明治初期の廃仏毀釈で神仏の分離がなされている。なぜ岡元家に安置されているのは不明である。

『西之表市史』下巻　正誤表

ページ	段・行目	誤	正
755	下段13行目	元山神社は、奥に住んでいる落合・倉元・白河・中崎・春山・元山・山崎・岡本の各家が奉祀する氏神神社である。	元山神社は、奥に住んでいる落合・倉元・白河・中崎・春山・元山・山崎・岡元の各家が奉祀する氏神神社である。
786	下段14行目	発見当時は、南九州地域では発見例が少なく、僅かに二個、いずれも本市で発見されている。	発見当時は、南九州地域でも発見例は少なく、本市でも僅かに二個発見されている。
798	上段5行目	当時残ったのは、日高家本尊六幅、曼荼羅六本、後に発見された三十番神四躰、鬼子母神像であった。	当時残ったのは、日高家本尊六幅、すなわち曼荼羅六本だけと、後に発見された三十番神四躰、鬼子母神像であった。
799	下段19行目	19年（一八八七）甑島より軍場集落に二年間（～昭和二十年）で五戸の移住あり	19年（一八八六）甑島より軍場集落に二年間（～昭和二十年）で五戸の移住あり
846	上段18行目	明治十九年度、甑島より平山と大野に合わせて三八戸の移住があり、平山集落が誕生。その後、昭和二十一年（一九四六）に平山集落から二四戸が移住、平園集落ができる。	明治十九年度以降、甑島より平山と大野に合わせて三九戸の移住があり、その後昭和二十一年（一九四六）に平山集落から二四戸が移住、平園集落ができる。
849	上段1行目	同伊関の鎌田平兵衛へのお礼としての水差しは種子島開発総合センターで保管され、	同伊関の鎌倉平兵衛へのお礼としての水差しは種子島開発総合センターで保管され、
850	上段19行目	○昭和四十三年、市立へき地保育所建設	○昭和四十五年、市立へき地保育所建設
852	下段1行目	大峰牧―上之町	大峯牧―上之町
852	下段4行目	当時、安城村には芦野牧と大峰牧の二つの御牧があった。	当時、安城村には芦野牧と大峯牧の二つの御牧があった。
852	下段6行目	通常は、まず大峰牧で馬追を実施し、翌日芦野牧で実施した。大峰牧では、当初は普通の馬を放牧していたが、	通常は、まず大峯牧で馬追を実施し、翌日芦野牧で実施した。大峯牧では、当初は普通の馬を放牧していたが、
852	下段9行目	御牧（大峰牧）は明治四年の廃藩とともに廃止され　後上之町集落の共有地となった。	御牧（大峯牧）は明治四年の廃藩とともに廃止され　後上之町集落の共有地となった。

『西之表市史』下巻　正誤表

ページ	段・行目	誤	正
855	下段12行目	小倉良助　宮園吾八	小倉良助　宮園喜八
856	上段2行目	榎本勘次　石橋種七　丸田辰五郎　江藤虎吉　地蔵佐太	榎本勘次　石橋穂七　丸田辰五郎　江藤虎吉　地蔵佐多
865	上段1行目	源助は、安城の大峰牧で馬を育てていた。	源助は、安城の大峯牧で馬を育てていた。
865	上段6行目	もとの大峰牧で馬の飼育に励んだ。	もとの大峯牧で馬の飼育に励んだ。
865	上段10行目	このとき、大峰の牧場には、馬が二〇頭もいたが、	このとき、大峯の牧場には、馬が二〇頭もいたが、
865	上段14行目	芦野牧や大峰牧で行われていたが、	芦野牧や大峯牧で行われていたが、
865	上段17行目	この後、大峰牧は、久芳の「私牧」となり、	この後、大峯牧は、久芳の「私牧」となり、
867	上段22行目	西之表西町の慈遠寺境内にあったが、大石（一九九六）による、明治初年に安城下之町宮園（妙泰寺跡地）に移し祀った。	西之表西町の慈遠寺境内にあったが、明治初年に安城下之町宮園（妙泰寺跡地）に移し祀った。
870	上段3行目	初めて山を開き人家が建つ（立山）。戸数は僅かに五、六戸だった	山を開き初めて人家が建つ（立山）。戸数は僅かに五、六戸だった
870	上段18行目	九月十五日、米国船カシミア号種子島東海にて沈没。乗務員八人安城立山に漂着し、救助する	九月十五日、米国船カシミア号種子島東海にて沈没。乗務員七人安城立山に漂着し、救助する
870	上段21行目	十月、安城小学校校内にカシミア号関連「紀徳碑」を建立	安城小学校校内にカシミア号関連「紀徳碑」を建立
870	下段9行目	平山地域の長男以外の人たち含む二四戸が平園に入植・開拓	21年（一九四六）平山地域の長男以外の人たち含む二四戸が平園に入植・開拓

『西之表市史』下巻　正誤表

ページ	段・行目	誤	正
巻末資料提供・協力機関	下段22行目	種子島の語り部「ぢろの会」	種子島の語り部「ぢろの会」・熊本県護国神社
巻末西之表市史編さん関係者名簿	上段4行目	西之表市史編さん委員会 委員長　大平和男 副委員長　佐藤秀正 委員　川村孝則 塩﨑義政 徳永和喜 鮫嶋安豊 奥村学 尾形之善 上妻敏男 上妻陽二郎	西之表市史編さん委員会 委員長　大平和男（令和三年十月一日～） 中野哲男（～令和三年九月三十日） 副委員長　佐藤秀正（令和三年十月一日～） 大平和男（～令和三年九月三十日） 委員　川村孝則 塩﨑義政 徳永和喜 鮫嶋安豊 奥村学 尾形之善 上妻敏男（令和五年五月十九日～） 吉原三保子（～令和五年五月十八日） 上妻陽二郎

別紙１

『西之表市史』下巻　正誤表

49ページ

（誤）

下西校区

慰霊塔（わかさ公園）
日清日露戦役戦没者三〇人
日支事変大東亜戦役戦没者九〇七人

昭和33年11月１日
建　立　西之表町長
西村建夫

平成３年11月２日
再建立　西之表市長
榎本　修

慰霊塔（日典寺）
西南の役・日露戦争・大東亜戦争戦没者六一人

昭和32年建立
平成２年再建立

戦没者慰霊塔（鞍勇）

戦没者之碑（下石寺）

（正）

下西校区

慰霊塔（わかさ公園）
日清日露戦役戦没者三〇人
日支事変大東亜戦役戦没者九〇七人

昭和33年11月１日
建　立　西之表町長
西村建夫

平成３年11月２日
再建立　西之表市長
榎本　修

日露戦没記念碑（右）
殉死招魂（左）
（わかさ公園）

陸軍大将正三位一等功三級　町田紀宇　書

建設者　西之表兵事會長　中村良一郎、在郷軍人西之表町分会長　岡留三雄

慰霊塔（日典寺）
西南の役・日露戦争・大東亜戦争戦没者六一人

昭和32年建立
平成２年再建立

戦没者慰霊塔（鞍勇）

戦没者之碑（下石寺）

『西之表市史』下巻　正誤表

68ページ

（誤）

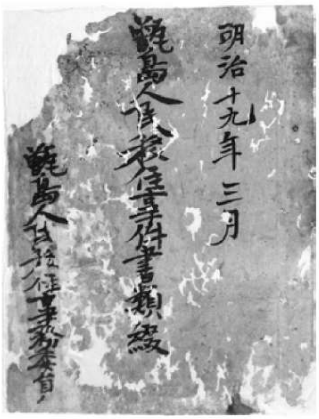
表６－13　甑島移住民の島内移住状況

現自治体	村名	移住世帯数（戸） 明治19年	明治20年	字
西之表市	西之表村	15	16	石堂、今年川、鞍勇
	国上村	13	12	野木平
	伊関村	16	7	柳原
	安納村	3	2	軍場
	現和村	22	8	川氏
	安城村	26	24	平山、平園、大野
	古田村	25	0	上之町
	住吉村	11	1	形之山
	合　計	131	70	
中種子町	牧川村	4	0	
	納官村	15	3	
	増田村	24	15	
	野間村	24	14	
	油久村	9	5	
	田島村	14	5	
	坂井村	17	6	
	合　計	107	48	
南種子町	中之村上方	25	0	股の口、長木田、大川
	中之村下方	11	0	真所、里、山神、郡原、夏田
	西之村	16	0	崎原、上瀬戸、立石
	島間村	20	0	浜久保、田尾、牛野
	合　計	72	0	
総　計		310	118	

（参考：野木之平移住百年記念実行委員会『野木之平百年』）

も出た。住民の乗り込んだ船は幅約三メートル、長さ約一〇メートルの「団平船」で風の強い時は帆で走り、風のない時は五本の櫓で漕ぐ船であった。赤尾木港には移住民を受け入れる村の世話人たちが迎えにきており、その日は西之表で一泊、翌日、各入植地域へと出発した。

甑島移住民の島内移住状況は、表６－13のとおりである。



甑島人民移住事件書類綴

（正）

表６－13　甑島移住民の島内移住状況

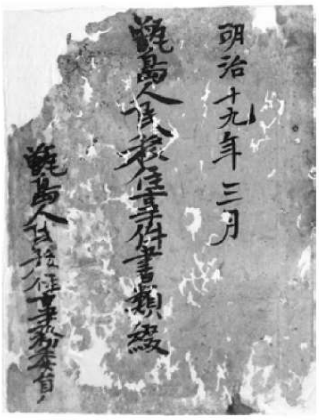
現自治体	村名	移住世帯数（戸） 明治19年	明治20年	字
西之表市	西之表村	15	16	石堂、今年川、鞍勇
	国上村	13	12	野木平
	伊関村	16	7	柳原
	安納村	3	2	軍場
	現和村	22	8	川氏
	安城村	26	24	平山、平園、大野
	古田村	25	0	上之町
	住吉村	11	1	形之山
	合　計	131	70	
中種子町	牧川村	4	0	※立山区御牧（9）
	納官村	15	3	
	増田村	24	15	
	野間村	24	14	
	油久村	9	5	
	田島村	14	5	
	坂井村	17	6	
	合　計	107	48	
南種子町	中之村上方	25	0	股の口、長木田、大川
	中之村下方	11	0	真所、里、山神、郡原、夏田
	西之村	16	0	崎原、上瀬戸、立石
	島間村	20	0	浜久保、田尾、牛野
	合　計	72	0	
総　計		310	118	

（参考：野木之平移住百年記念実行委員会『野木之平百年』）

移住記念碑、地域伝承、公的記録とに数値の不一致が見られる。その要因には公的、私的移住など様々思考されるが、移住から139年が経過した今日、正確な実態把握は困難となった。

も出た。住民の乗り込んだ船は幅約三メートル、長さ約一〇メートルの「団平船」で風の強い時は帆で走り、風のない時は五本の櫓で漕ぐ船であった。赤尾木港には移住民を受け入れる村の世話人たちが迎えにきており、その日は西之表で一泊、翌日、各入植地域へと出発した。

甑島移住民の島内移住状況は、表６－13のとおりである。



甑島人民移住事件書類綴